道陸神の戯

泉鏡花作

全一章

風の方が驚いた。びゆうと一唸り我がまゝに吹きには吹いたが、此のくらゐな事で人間が一人、けし飛ばうとは思はなかつたらしい。・・・・・其處で吃驚してすくんだやうに吹留めた、息をひそめて靜まつた。

場所は、大溝が蜒々〳〵と通つて、一方は低い崖に、まばら垣の續いた場末の町家の背戸で、片側は其の大溝以上に曲り崩れた一帶の土塀である。勿論、武士町の裏手に當るが、草も枯れ次第、落葉も落次第、積り次第に成つて居る荒果てた小路である。此のつゞきの一處に、以前、男と遁げようとしたきれいな妾の跨ぐ處を背後から追つて槍で貫いたと言つて、壁に流れた血のあとが塗りかへても／＼形にあらはれて消えないと言傳へる土塀がある。・・・・・何處と言つて、塀の面は確ではないが、むかしから氣味を惡がつて、めつたに人通りのない處だつた。目下

も然うである。あり來りの怪談だか、また、事實に裏がきをするかと思はれるのは土塀の低さで。・・・・・何のために低いのだか、これでは用心には成るまい、傘をさして通るととんぼが、覗くほどである。掛稻は高く、塀は低いのが、泰平を象徴する、むかし此の藩の誇だとも聞くが、或は然うかも知れない。で、此だけ低ければ、かよわい女でも、少々〳〵思ひ切つたお轉婆をすれば、容易に越えられよう。

いまは、つい二町とは離れない處を、電車が通つて居るが、それでも此の裏小路は寂然として居る。

尤も、兩方が一廉廣い町通りだから、どつちへ出るにも此處を歩行く必要は更にない。手近な處は家毎裏〳〵の不精な芥棄場にも成つて居るから、深溝で、水も流れるのだが、いつでも支へて居る。それに尚惡い事は、崖の上の處に古い大な私立病院があるので、設備のよくない下水がみな流れ込むので堪らない臭氣がする。しかし、そのお庇で病院へ抜ける處に、一ケ所こはれ／〵／だけれども假橋のやうなものが架つて居る。

たゞ兩方が背戸、また庭續きで畑さへあるから、樹木が多い、時節々々には櫻、もみぢの風情がある。もみぢの頃は寒いから、故と此處へ見に來るほどのもの好きもないけれども、花時分は、土地の公園だの、大川向うの山だのへ花見に出掛けた歸途が、日暮から掛けて、微醉で、ぞろ／＼往來する。酒にうかれて、からかつたり、からかはれたりする。女房、娘、男たちには、誂への小路で、朧夜などは特に人目を忍ぶのに可いさうである。世の中の、のんびりした頃には、植ゑて自分も樂まうし、人にも見せようと言ふ、町家の亭主、邸の隱居などがあつて、朝顏や菊もつくつたので、いまは雨風に荒び果てたが溝端には柳さへ植つて居た。

その、ひよろ／＼と瘦せた枯葉の柳が一本ある下に、袖も裾も殘すことか、番傘を持つたまゝ、仰向けに風に吹倒されて、溝泥へづツぷり陷つて、陷つたなりで、ぼかんとして居る男がある。

氣のもので・・・・・こゝが人足の頻な處だつたら、不用意のうちにも、鮒の如く蜿いて、とに角跳

上つたのであらうと思ふが、小路一條、前後に人通のなかつたことは豫め承知だつたに相違ない、陷る時、油紙は三ツに裂け、骨のばら／＼に折れた傘を枕にして、上半身に敷いたから、肩胸は然までにもないが、煽つて開いた外套の袖へ、上澄の汁が流れ込んで、腰は溝泥に埋れて居た。　ー　あとで聞くと、此の外套もそんなに安いものではない、中くらゐ贅澤な一着である。　ー　身なりも相應にかけて居る。

「何とも申しやうもない、此のあり状だけれども、死んだのでもなし、打處が惡かつたのでもなし、下が底なしの沼でない以上は、別に生命には差支へない。そこで、ばちや／＼、どろ／＼とやつて石垣へ手を縋つて這上つた。

足駄と傘は、もう溝の中で古草鞋同然に打棄つた。それでも、流行の中折帽は、上ると、ぐしや／＼と脱いで未練らしく抓んだが、餘り汚いので、ぽたんと棄てゝ、その時指を嗅いで見て、はじめて、ぶる／＼と身ぶるひした。此が此の男の溝から這上つた

第一の行動である。

いま吹いた風にだつて形容は出來まい。何とも言へない顔色だが、その容貌は滿更でなし、背恰好も・・・・・溝に塗れさへしなければ・・・・・調つて居る。

私は實は此の男を知つて居る。その、それ／〃＼の夥間では、一寸人の知つた劇作家だ。

しかし、こゝでは何うも名のらせ憎い。劇作家先生のために憚るのである。私は芝居は餘り知らないが、茶屋、小屋の席で、女連が、よく權九郎と云ふ事を言ふ。何でも泥田へ陷込んで、舞臺へ這ひ上つてから嘘をすると、同時に、鼻から鰌を吹き出すと言つた役柄ださうである。丁ど可い、いや生憎、此の溝に鰌は泳いで居ない。

ーー　今朝は霰が降つた　ーー

風も凩で、蚯蚓も引込んだ頃だから、鼻から鰌だけは負けてもらつて、假に權九郎先生として置く。

先生は、今度久し、ぶりで、こゝが故郷へ、旅行

の意味で來たのであつた。

　處で、歩行く處もあらうのに、選好んで、こんな希有な小路へ入つたのは、途に迷つたわけではない。まつたく地の理に通じて、此處のもみぢを見て通るつもりであつた。實は小兒ものうち、住家が、崖上の病院近に、古城の荒れた大手まはりにあつたと言ふし、先生も、漸と小學校へ通ふ頃には、くらし向きの貧しさに、東京だと朝の納豆と言ふ處を、雪の山國では、暮の頃から冬深い時を掛けて、「棒飴、かん／／糖。」と言ふものを、「棒飴、かん／／糖。」と寒さに震へながら、泣聲で賣つて歩行く。夜ばかり。夜遊びのかるた、雙六の兒たちのわびた菓子にも成るらしい。が、主としてはその可哀さが、大人の同情をひく商賣であらう。北國は雨が多い。特に冬となると殆ど晴間がない。時雨、霙の降る眞暗な夜の町を、びしより／／と莫蓙、合羽で、とぼ／／して、「棒飴、かん／／糖。」と、人魂のやうな提灯をたよりに泣いて行く幼兒の姿は實際可憐でいぢらしい。　ー　先生も此を遣つたさうだから、いづれ、住んだ町も場末には相違ない。が何しろ近まはりで、此の小路の景色を知つて居た

からであつた。

で、服装も・・・・・あり來りだが、綿でない大縞を揃へて居たから、棒飴賣の莫蓙に較べれば故郷へ錦であらう。が、だしぬけの霰に、今朝、吃驚したほど、陽氣がわり合に暖かゝつた所爲か、小路の樹は櫨さへもまだ染め果てゝ居なかつた。

でも、土塀にかぶさつた、山椿、庭とこ、大いのは榎、槐などの枝葉の蔭に、二本三本、薄く染めたのがあつて、溝橋むかうの雲も暗い奥を見込んだ處には、血のやうな梢の、雨に濡れて、雲切れの蒼空へ、點滴るばかり眞紅なのが見えた。傳説に聞けば、其の場所が美しい妾の貫かれた處とも言へよう。

いや、其處どころではない。もみぢの色のしたゝるのは可いが、溝汁のぼた／／雫する先生を何うしよう。

近松の淨瑠璃にいゝのがある、　ーー　（田蓑の島のやもめ鶴、濡れて立つたか可哀さに）　ーー

しかしそれは溝ではない。それに嘉平治は色男である。

處へ　ーー　もう一つ淨瑠璃慣用の文句を借りよう、　ーー　（果報か、因果か）　ーー　其處へ顯はれた婦がある。嵯峨だと駕籠に乗つて居て、その男の濡れて立つたる可哀さに、雨どひを取つて、ひらりと投げるのであるが、そんなのが此處へ來る筈はない、最も殺されたお妾の幽靈は駕籠に乗つて出ようも知れぬが、然うではなかつた。

不斷着にしても見すぼらしい黒つぽい銘仙の着もので、コートなどは着て居ない。紫コール天の肩掛を深々と襟へ巻いて、おゝ寒、といつた形に折込んだ袖に、時雨空の用心に、蛇目傘を伏せて抱いて片手も冷たさうに　ーー　包み方ですぐ知れる　ーー

すき切れのした、それでも縮緬の袱紗で、藥瓶を下げて居る。櫛の齒も入れないらしいが如何にも房りした髪を、當世の束髪で大柄で色白だから小路に目立つて、背負上の色と袖口にこぼれた紅入は、わびし氣な中にも媚かしい。一體が圓顔だが、頤にやつれが見えて、が、眉の濃い、鼻のスッと隆い年紀は二十六七のなが、その奥の暗い方から、陰氣に寒さうに出て來て、溝橋の袂で、權九郎先生の其の状を一目見ると、空は暗く、雲は低くても冬の大氣は

透通るから、顔容に少しもおぼろげな處はなかつた。

「あら。　・・・・・」

風情に似ない、快活らしい聲を掛けると、臺所穿の緒のゆるんだ足駄で駈け寄つたから、すじりもじりに裾が亂れて、前垂の下に紅いのが亂れた。

「まあ、先生。」

「お、お孃さん　ーー」

と、それでも人間の聲で言つた。

ーー　いま此の婦は、・・・・・別に其の姉ぎみとゝもに、町の目貫の大商人の娘たちで、權九郎先生が、小兒で棒飴を賣つた時の、對の友染のお花主であつた　ーー　莫蓙着た霙の姿を思へ。　ーーこゝで其れを言ふのは、先生を餘計にふるへさすのではない、却つて、寒さ凌ぎに適當であらうと思ふ。・・・・・

「また、お孃さんは眞個に止してね。・・・・・一體全體、何うなすつたツていふのよ、先生、それは？」

「お話に成るもんですか。何にも彼にも此の體で

す、面目次第もありません。」

「餘り姉にお迷ひなさるからさ。おほゝゝ。」

と笑つた。あの、頸まで掻すくんだ寒がりが、男に向ふと、肩も、袖も、膚まで暖さうに、柔かく成つて解けたのである。

「御覽なさいな。とう／＼溝へなんかはまつ了つて、何うしようツて言ふんです。」

「方がへしが着きません。恁うなりや圖々／＼しく、何うにかにして下さいと言ひたいんですが、・・・・・御迷惑は分つて居ますから、何うにでもして下さい、御勝手です。」

「勝手だつて仕やうがないわ。餘りだらしがなさ過ぎて馬鹿々々／＼しいツたらありやしない。」

と云つた。なまじ、おいたはしいなぞと甘やかすと、此の場合、やわな先生は倒れて了ふ。蓋し早打を詈る術だ、令妹は軍師と見える。

「何しろ堪りませんね、困つたわね、それちや、・・・・・さあ一時しのぎ。代ものは、色兼が

なさ過ざますが、膚でも暖めてありますよ。」

桃色の懐爐である。

「はい、さあ、私のだと思つて氣味を惡がつては可厭ですよ。姉妹だから姉の血も通つて居ます。尤も、川の水と、此の溝ぐらゐ違つて居るかも知れないけれど、先生だつて、さしあたり溝なかまだわね。」

「何とも申しやうがない。何にいたせ此はありがたい、此はありがたい。」

「血が通つてると聞いたゞけで、くわツくわ、ほれるでせう。暖かいわね。」

「汗が出ます。」

と兩の手を懐へ、下腹を抱へて、しやがんだ時、令妹は、柳の細い幹に手の蛇目傘を立掛けた。

「さうして・・・・・これから　ーー？」

「えゝ？」

「逢ひに行く處なの、・・・・・・歸りがけ。・・・・・・それとも、もう昨日のうち逢つたんですか。」

「どちらへ。」

「どちらへぢやあないぢやあゝりませんか。芝居なんかお書きなさる癖に・・・・・・」

先生の顔色まるでなし。

「今年の春もさ、此の土地で、あんな芝居をさせてさ・・・・・二十年も前の事だし、他人はもう誰も知らないから可いけれど、（戀の飴賣。）なんのツて、第一外題が甘ちやんだわねえ。」

「・・・・・・・・・」

「姉が見たら何うだらう。・・・・・あの人は芝居どころちやあなかつたから見やしなかつたけれどもさ。一一一所に居た、私の娘さへ、ちやんとそれだつて事が分つたぢやありませんか。」

「今度の汗は冷い方だ。」

と權九郎先生は手の甲で額を擦つた。

「お美根さん　（姉の名）　はあの通りだから打つかつて言つても、　（私見たやうなものにそんな。）　か何かで、卑下謙遜で眞個に、眞個にはしないでせうけれど、私の方は、おませでね・・・・・少々身を持崩しの形ですからね。　ーー　あんな芝居をかく方だもの、何を言つても構やしない。」

と、くもつた聲を明るく戻した。

「一家は絶えるし、夫には生別れ、死別れで、姉妹がおなじ不幸で落魄れても、姉は　（落人）　で、私は　（夜遁）　の方ですからね、・・・・・おませよ。・・・・・だから、はじめから、薄々知つては居たけれど、あんなにまで、お美根さんに惚れたのかねえ。先生あなたは　ーー　生命もいらないほど眞劍に　ーー　一所に見物した私の娘は、私より、まだおませだと見えて、私よりか餘計に感心して、

（生命も要らない・・・・・それ以上だわ。）

と言ふんです。おや、それ以上、・・・・・生命もいらない以上ツて、一寸何うするんですの、先生・・・・・あゝ、もしかすると溝へおつこちる事かも知れない。ほゝゝ。」

「何とでもおつしやい。唯息のあるばかりですよ。」

とばかりである。

時に、妹御は自分の娘の事を言つた、　ーー　實は、身邊も境遇も時日も、此國と東京ほど隔つて棒餘の形ぐらゐな小さな立志傳中の我が主人公は、十年にも二十年にも、姉妹たちの状況を審かにはしなかつた。・・・・・突然、夏のはじめ、今様の封筒、細君の取次には聊か穏かならぬ手紙を受取つた　ーー

はじめに、　「・・・・・お美根さん　ーー　今川の私は姪です。お美根叔母さんの私は姪です。（即ち此の妹の娘に當る。）　と名のつて、今度の小町座の演劇を拝見して、私の母・・・・・御存じと思ひますが、多根子に聞いて、悉しく先生の事をうけたまはりました。小學校の時分から、お名は知つて居りましたのに・・・・・と言つて、　ーー要するに、ーー　いまの身の上は棒飴賣りです、お傍へ參つて志を遂げたいと言ふのである。年は十六だと言ふ。

先生は紅梅の中から鶯が銜んで來て、玉づさを授

けたやうな時めきを感じた。勿論その手紙が薄紅の封筒と、色インキが使つてあつたゝめではない。今川お美根さんの名ゆゑであつた。しかし、母と言ふ妹の多根子さんに返事をした。少女が都への夢見るやうな、あこがれを非難した事、それだけでも解るが、手紙の名宛がお兄様でなくて、をぢ様であつたと言へば、尚よく解る。

多根子さんから折返し、返事があつて　お考へ通り。よく娘に意見する事、ことに、母には内證で、わがまゝを申上げた若い娘を御遠慮あそばし、その母におんかへりぶみたまひしこと、と淺からず禮がのべてあつた。

一夏、秋も過ぎ、此の冬歸省したのである。　ーー

權九郎先生に取つては、此のくらゐ張合のある、好都合の歸省はあるまい。

考へても見るが可い、霙泣きの小僧があはれがられたばかり、　ーー　姉は土地第一の豪家の令室と成つた　ーー　いはれなき人に情誼を通ずるには、二十幾年來これだけの機會はなかつたであらう。そ

れは先づ妹を訪ねて、其の娘の動靜を見舞へば、すら／＼と道は展けるのである。

ーー　昨日は豫定通り、手紙の處がきを辿つて、多根子さんの住家を訪ねた。場所はたとへば此處から町を中に、大川を一つ隔てた山の根の矢張り士族町であつたが、行くと、他人が住つて居て、わづかに五月ばかりの間だつたのに行方が知れない、　ーー

先生は、あゝ運命だ、と歎息したほどである。我がこれほどの念が、爾し一朝にしてたやすく遂げらるべきものではない。恁う、あきらめながら、あきらめ兼ねた。　ーー　くどくは言ふまいが、抜け出した魂を探すほどつきつめて、それでも辛うじて居處を知ることが出來た。一寸見當の違つた町の綿屋とか古着屋とかの二階借をして居るのだ。と分つて、捜り當てると、綿屋は綿屋だが、ぼろ綿の打直し屋で、先生が目を据ゑて、そこを訪ねた時、　「お留守。」　で、再び落瞻した。しかし行つた先は分つて居る。

「お二階の奥さんも、御不幸つゞきで近々に九州の方へお引越しになりますのぢやが、唯今は、據ない御親類に、手の放されぬ病人がござりますので、其處へ看病に行つてゞござりますよ。」

先生は更に落膽した。が、綿屋の媼さんが他國ものと見て深切に、そんなに遠方ではないからと、小さな娘を其の出さきへ見せに遣つてくれた。店前に腰をかけて待つ間の心持は、さながら魂が古綿に成つて燃えたのである。

唯、使ひの小娘より先に、四辻へ來たのは　ーー　そのたゞ蝶々髷の頃で、間は遠く隔つたのに、直に其と認めたのは、手紙が縁をつないだのであらう。

もと大商人の愛娘で、のちに醫學士の令夫人が、姿は今日とおなじであつた。それは先生は承知をして居た。が、以前の身分に相應しい、それらしい態度を備へて、二階で慇懃に、しかし打解けた挨拶があつた。

「まあ、ほんとうに、成長にお成りなすつたわねえ　ーー　先生。」

雜と此の調子だ。しかし、先生より年紀は下なの

である。

が、半時とは座に落着けなかつた。娘は親の意見も用ゐず、既に東京へ走つたと言ふ。第一手の離されない病人を看病して居るのである。それに、諸道具、手まはりも、殘らず九州の落着さきへ送つたとか、古綿屋の綿のやうな疊六疊の一間に何にもない。眞中にブリキ張の火鉢一つ。堅い座蒲團も一枚下から借り上つた始末だし、多根さんも半、つき膝で腰を浮かせて話すのだから、先生も座を定め得なかつた。が、然も親げに、ちら／＼と皓齒を見せては莞爾々々し通しで、つい、ものゝ言ひやすさに、それが目的であつた姉君の居處を聞くと、こんどは皓齒をまるで見せて莞爾して、お美根さんの、殆ど隱家と云ふのを心易く教へたのであつた。

忽ち此の場處で、出逢はうとは、且其の上、多根子が恁うした態度をして、こんな口のきゝやうをしようとは、殆ど想像にも及ばなかつた。

時に、人の顔した泥龜のやうな、權九郎先生を、柳あしらひに、流眄して、

「また、それに何うしたつてんでせう。・・・・・

姉の居るかくれ家の、ぢき近所の劇場ぢやあゝりませんか。それだし何て半間なんだか、（行逢橋の場）だつて姉の奥方様が、女中下男大勢のお供で、朧月夜を花見がへりの場面があるわね。・・・・・・そこへあなたが學生風で出るんだが、ほゝゝ・・・・・・まあ、面と向つては堪忍してあげませうね。

ー　けれど、あの行逢橋は劇場から一町と離れて居やしない鐵橋だのに、その幕が開くと、しも手に半分、擬寶珠のついた太鼓橋が顯れたわよ、柳が植つて。・・・・・串戲ぢやあない。せめて、一本橋か、まだ桟橋なら、大昔の間違ひだと思ふけれど。」

「あゝ、顔から火が出ます。」

「結構。暖つて。」

と、澄まして言つた。

「かさね／〃／何とも申しやうはないのです。知つて居て、何だつて、私が演らせますもんですか、こゝで興行した事は、お娘御のお手紙ではじめて知つて、いま溝へ落ちた心持が丁度其の時とおなじです、掛合はうにも、つかまへ處のない田舍まはりの

一座ですから、その上に、仕種も思ひ遣られるんです。」

と、まつたく赤くなつて俯向いたのである。

「可いわ、あなた、逢つたのね　ーー　逢つたのね、姉に。お美根さん、何にも知らないで、清しい顔をして居たでせう。」

「せめてもですよ。」

「どんな工合。」

中腰に成つて居寄つて言つた。

「先生、初戀の姉に逢つて、そして？」

「いや、何うも・・・・・」

「おつしやいよ、飴屋さん。」

「あゝ、ありがたい。」

「その勢ひで！・・・・・さあ、お聞かせなさいつたら、私に恥かしがる事はないぢやあゝりませんか。それだし、おなじ貧乏はして居ましてもね、いまの（落人）と（夜遁）の一件でね、姉とはまるで氣が合ひません、あちらは優しい人ですから、別に隔てはしないけれど、私が自分で身を思つ

て、近頃では餘りゆきかひをしませんから、先生が何を私にぶちまけたつて、姉の耳へは入りません。ね、おつしやいよ、聞きたいわ。あんな芝居を見せるんぢやあゝりませんか。」

「一言もない。」

か、飴屋の一喝で、言も元氣づいて、

「昨日、あなたに、お美根さんのお好きなものはと伺ふと、濃い茶がお好きだから、春屋の饅頭。・・・・・」

「紅白の。・・・・・えゝ、然うよ、　ー　年増のお姫様へ貢もの、あなたの氣ぢやあ大川の龍宮へ行くゝらゐな心持だつたんでせう。　ー　さきは龍女です。その大お好きなものを教へて上げた私は魔女ね。こゝは私でなくつて、　（まろ）　とか云ふべき處だつて・・・・・娘のおぺら子さんなら言ふ處よ。」

其の氣焔、當るべからず。

「いきがけに、先刻、春屋へ行つて、その紅白のを求めましたよ。」

言ひつゝ思つた。權九郎先生は同時に冷汗を禁じ得ない氣障を遣つた。おなじく近所だが、當國第一と人も許した老鋪の菓子屋で、紅白、精製のぎうひ饅頭は、其の店の金看板である。從つて値も貴い。・・・・・平民なぞは近づき難い權式なものである。

雪の夜なりし、母親の一周忌に、生前すきだつた、其の生菓子を、佛壇にと、飴賣のもどりがぎうひ饅頭。

「どれほど。」　・・・・・

「紅いのと白いのと。」

と、びしよ／＼の莫蓙の下から、うどん粉で、白い、それも冷い、飴の抽斗を抜いて出して、

「二つ。」

頭をてか／＼した店のものが、

「何だ二つ。お前たちには毒になる、よしな／＼。」

と言つた。

先生は、不斷から癪に障らして居たのである。

外套でずつと入つた。・・・・・あゝその店のも

のは、彼處に髪も白く成つて皺びて居やがる。
「一番といふ折を出しておくれ。」
へいといふ若手代の顔を、澄まして見て、
「さきへ二つ、二つだよ、出して貰はう。他國もの
だ。評判を聞いて來たが、生命がけといふ戀人の
許へ持つて行くんだ。」
此の時は、權九郎先生の氣焔、當るべからず。
「毒味もしようし、まづくつては仕方がない、食
つて見る。」
店中が顔を見た。當の若手代は呆氣に取られた。
「へゝゝ、とひやうもない御串戲で。」
が、恁う出られては家憲になくても、店端へ盆で
持出さないわけには行かない。二三人、件の白髪も
分別らしく中へ交つて、耳打をして、苦り切つて、
それから持つて來た。
「茶は何うしたい？　出しがらでも可い、熱い奴
を頼むぜ。」
椅子はあるのに、框へ上胡坐でむしや／／食つた。
「結構、では、一番の此の折へ。」

それから椅子に直つて、故とらしく、銀製のケー

スを出して、のみつけないウエストミンスターをわざとコバルト色にふツと吹かした。旅館の貸傘のすぼめもしないで投出したのが、ばツと裾へ搦んでくる／＼と廻ると、すさまじく、はやてのやうなのがドッと來て、車軸の如き雨になつた。　ー　今朝は、だしぬけに雷鳴して、忽ちこれと同じに霰が迸つたのであるが、此の時の激しさは、雨流れが大道路を左右へ馬の鬣の如く颯と捌けて、波を打つて落ちた。トタンに褄端折した、緋に白の麻の葉の絞の蹴出しを高く、紺蛇目傘を挫げさうに、姿をたわゝに蜿らした若い女を視て、こゝもたゞ地方ではないと思つた、と同時に、道行く人は消えるやうに軒々へ捌かれた。又一はやて勢ひを増すと、人影もない町に、雨の幅を中窪みに吹き撓へて、さながら立つ波の壁面に、人を呑まうとする風雨に向つて、剰へ、目の下の坂を上りに、冬構の大根を堆く積んで、荷車を曳いて來る男を見た。車は瀧なす雨の斷崖にも押流されない。彼は莫蓙をたゞ胸にあて、２の字に空へ刎ねて紐のちぎれる笠を解いて咽喉にあてた。が、手で壓へないで、びつたりと向風の激しさに其の咽喉下に平扁く附着いた。それなり、ぐいと雨風

の勢を、推戻すやうに進んで來る。突切つて、春屋の前を通るのを視ると、背中は裸體だつたのである。

權九郎先生は、卷莨とゝもにハタとケースを落した。

先生は、ーー　活花の夜稽古に、といつて、結綿のお美根さんが、買つたあとの飴賣の兒を、暗夜にひとつ蛇目傘に入れて送つた一夜の、雪の項を思ひ、褄の紅梅を思つた。且其の時の、莫蓙の下のわが血汐を思つたのであつた。　ーー　あの男の意氣に劣るまい・・・・・

いまも寒さを覺えないばかりである。

「ほかに望みはなかつたのです。　ーー　實は、おなじ故郷の友だちが一人、此も小兒の時の戀があります。邸がたのお孃さんで、何でも知事とか、師團長とかの奥さんに成つたのです。それが大阪に移つた時、機會があつて、十五六年ぶりで逢つた時、けろりとして駄辨を叩いて居て、暇乞して歸りがけに、しかも玄關で　「お雪さん。」　と名を呼んで、「私は貴女を戀して居ます、忘れません。」　と

手を握るが疾いか、靴を引掴んで遁げたと言ひます。不断隨分したゝかな男ですが、一生懸命は精一杯、それ以上の事は出來ないさうです。

私はそれだけの事も望まないひ　ーー　あの紅白の饅頭を、　ーー　一つ、希くは紅い方をお美根さんが、お手で半分に割つて、半分食べた半分を、と念じ・・・・・念じましたよ。」

「わかりました。ほゝゝ、ですが、叶ひましたか。」

「は、」

「あのね・・・・・」

と冷したやうに笑ひながら、

「饅頭を、姉に　ーー　割つて貰つて、半分づゝ食べたんですよ。」

「處が不可いんです。折角のお持せですから早速と言ふお聲がゝりだから、難有いと堅唾を飲んで居ますとね、紅白のを木皿に取分けて、お初穂を。

ーー　失禮ながら、お佛壇はありません、茶棚の上のお位牌へ・・・・・」

「をかしな顔をしなくても可うございます。旦那の

ではありません。姉は嫁入さきが分散した折に、離縁になつたのですから。」

「いや、それは蔭ながら存じて居ります。それから、私に、　ーー　まあ、お一つ、どれが可いでせう。　ーーちやんは、と私の幼名をお呼びなすつて、紅い方を。御自分、お美根さんは白い方を。」

「ふゝツ、御勝手になさいましな。」

「こゝだぞ、千載の一遇と、敵の首を狙ふばかりに、お美根さんの手許を凝視めて、　（私は生意氣に酒を飲みます）・・・・・と。」

「將を射るに馬を何うとかツて聞いたわね。」

「學者でおいでなさる、偉い。・・・・・棒飴賣が酒を啖ふとは實は言憎かつたんですが。然う言ふと、まあ、と不思議さうな顔をして、ーー　そしてお醉ひなさいますか　ーー　（醉はない酒があるものですか。）　ーー　些とも甘いものは不可ません。が、お相伴をしたうございます。半分だけ頂戴します。貴女のお手のを、あゝ貴女のお手のを　ーーお美根さんが、あれ、そんな失禮な事が私に・・・・」

權九郎先生は、ぐしよ／＼の膝に兩手を張つて、項を垂れつゝ言つた。

「其ッ切です。」

「ほゝゝ、それで失望とやらをなすつて、ぽかんとして、こんな小路をうろついて、風に吹倒されたんですね。」

「さあ、風もあります。何しろ、びゆうと吹いて來て、重い番傘を、下から卷上げさうにしたんですから、惡く溝端は歩行いて居たし、足が浮いて身體がぐら／＼と廻りました。でも、がツしり此の柳に片手を掴つて、立派に蹈こたへた筈ですが、ひどい風だと、順に樹のしなつて行くのを、ふツと見ますと、向う奥の、あの、もみぢの眞紅な、あの土塀へ、裳がのつて、椿の樹の上へ顔を出し、緋縮緬の袖かと思ふ女が立つたぢやあゝりませんか。まさか、だが、噂のある處です。ハツと思ふと、其のはずみで。」

風が呆れた。風袋を控へた大鬼は、峰の、もの見の松あたりに控へて、山嶽を鳴らし海洋を煽つて居る。こんな掃溜の場所を承はつたのは、ほんの下端

の火吹竹に過ぎないから、命令もないのに、濫に人間を吹倒して、お頭からお眼玉を啖らはう、しまつた、と呼吸を殺してひそんだのである。何だ、膚の違ふお妾の怨靈に怯えたのか、馬鹿にして居る。・・・・・中ツ腹で、また一陣、たゞし加減をしながら吹きはじめた。

お多根の、鬢も袖も颯と動いた。

「私よ、・・・・・それは。」

「えゝ。」

「そして、何、土塀の上へ立つもんですか・・・・・跨いだんだわ。」

「驚いた、あなたか、飛んでもない。」

「ほう、尤も、些とは飛ばなくつては下りられませんがね、此の橋を渡つて、病人の藥を取りに行くのに、表からは隨分廻りでしよ。　・・・・・。　鋤か鍬で、二ツ三ツ突けば、すぐ出られるくらゐの穴は、壞土塀にあくんだけれど、借りるのも億劫だし、それだし、面倒だし、塀の上から一寸々々行るのよ。」

「人が、人が見たら、何うするんです。驚いたな

あ。」

「めつたにないわ、人通りは。・・・・・また、誰か見て、綺麗なお妾の幽霊だと思つて、吃驚すれば、それが、今の私の身には、不思議な花なり、もみぢなりよ。・・・・・ぢやなくつて？・・・・・先生。もう、こんな、しがなさでは、そのほかには、人に見られもし、見せられもする事はないのです。誰か引くり返つて目をまはせば可い、と思つてね、實は、澄まして、あすこへ、土塀の上へ腰を掛けて居る事もあるんですの。時々は・・・・・洗髪を捌いてさ。」

「魔ものですな。私は投げ込まれたも同じだ。」

「ですから、何うにかして上げるつもりよ。」

「つもられません。あなたに何うにかされては大變だ。」

「取つて食はうと言ふまでも、魔ものゝ言ふやうにおしなさい。あの紅白の貢ものを教へてあげた、魔の女の言ふことですよ。」

「・・・・・・・・・・」

「可ござんすか。　ーー　何しろ、その溝泥です

がね、早い處は私のうちへ、塀を乗越して入つて始末をするんだけれど、それは不可ません。何うせ私たちの巣屈ですから、そんな事をすると、貴方が危い。こんなのでも、私のきものを、脱ぎますか、・・・・・それは貴方に着られますまい。其處でゞすね、丁と可いやうにして上げます。私の言ふこと、いえ、魔女だから　（まろ）　（みづから）

（わらは。）　の言ふ事を肯くんですよ。　ーー

さあ、その外套を此處へ脱ぐの。・・・・・いゝ羅紗ね、立派な繻子だわ、惜いこと。ーー　帶も解いて、大丈夫。・・・・・衣ものも脱ぐの。・・・・・あら、お念佛を稱へては不可ないことよ。

（あびらうんけん）　も、　（あぶえまりあ）　も何にもなしに、唯　（紅白々々）　と稱へて、念じて、　ーー　然う。すいたらしい獨鈷だこと。さあよ、衣服をぞろりと・・・・・紅白、紅白。」・・・・

「紅白、紅白。」

「然う、然う。・・・・・絣が揃つて、本場だわ、通り裏だわね、奥さんが驕りましたね。胴着、あゝ、

感心ににやけやしない。」
「此れも、」
「其れも。」
「紅白、紅白。」
「襦袢は、止さうか知ら。いゝや、次手に脱がして了へ。」
「脱い了へ。」
「其の時計も此方へ。　ーー　袂の堅いのは、あゝ、然う、巻莨入れですか、紅白、紅白。」
「紅白、紅白。」
多根子は腰紐を解いた。
先生は柳に縋つた。薬罐とゝもに、多根子は、衣類一式を外套にくるんで、手際に、腰紐に巻いて、づしりと提げた。
莞爾して、
「貰つてよ。」
「・・・・・・。」
「あゝ感心に青くも成らず、震へもしないわね、紅白の呪のおかげですよ。」

風は鬢を拂ひ、髪を拂つた。

「先生。」

屹といつた。

「まろ、みづから、わらはの言ふことをお聞きなさいよ。・・・・・奥山の孤家の鬼の棲家へ行暮れて宿つた旅人が、一口開いた鬼に追はれて、はや生命危い時辻堂を見て飛込んで、助けたまへ、おゝん神、御佛と縋りついたといふ話は御存じ？・・・・・全く、生命がけ、いまはの期に、その神様、佛様に、氣兼遠慮をして居られますか、見得も、恥も、外聞もありますか。

もう一つ教へませう。　ーー　姉はね、お美根さんはね、霙に、雪に毎晩通る、飴を賣つたお兒を見て、銀貨をたんと持たせようの、友染の炬燵へ入れたいの、そんなことは言ひませんでした。私はよく覺えて居ます。姉の優しさは、姉の情は、その上を越して、「あゝ、あの兒と、一所に飴を賣つてあげたい。」と言つたんですよ。鬼が聞いても涙が

出ます。　ーー

ーー　分りましたか。」

先生は泣いて居た。

「饅頭を分けて食べたい人が、何故、縫紋の羽織なんか着て行くんです。いまそのなりで、合羽一枚、莫蓙を着ておいでなさい。さ、そのなりで。　ーーよ、じれつたい。何故辻堂へ飛込みません。飛びついて、しやにむに本尊へ縋らないのです。えゝ、じれつたいね。さ、鬼が追ひますよ。鬼が！　くわッ！　口を開けて、鬼が。」

と言ふ。

ぱつとさした紺蛇目傘は、大きさ車輪に相齊しく、鐵漿つけた口を張れるに似て、殆ど裸體の先生を、バサ、バサ、トンと突いて推すと、其勢ひでツゝと駈けた。

餘りの擧動に風が憤つた。下から轆轤をなぐつたので傘を吹かれて、よろ／＼と土塀についた。もみぢが、颯と亂れかゝると、落葉はパツと捲上つた。雨はバラ／＼と斜に飛ぶ、唯見る權九郎先生の、やせ腕に、脛に、ばら／＼と紅は、惡鬼の噴く炎から

吹(ふ)きかゝる火(ひ)の粉(こ)に似(に)つゝ、あらず、木(こ)の葉(は)のほりものが散(ち)つたのであつた。

ーー（完）ーー

☆